

なぜか幸せな心臓手術 ①

高橋 一郎

映画監督でありCOMLのボランティアメンバーでもある高橋一郎さん。

昨年心臓の大動脈弁置換術を受けられたのですが、
そのご経験について「**すごく幸せで、病気になってよかった**」とおっしゃっていました。
その体験を今月号より連載で綴っていただきます。



●はじめに

私は還暦を迎えた年に生まれて初めて入院体験をした(心臓手術を受けたのです)。かかりつけ医の紹介で出かけた〇〇病院は病床数500床、一年間の入院患者数は10000人を超えるという総合病院(大きな)。循環器内科でA医師の診察を受けた結果、大動脈弁閉鎖不全症と診断された。心臓の大動脈弁が傷んで隙間ができていたため、いったん左心室から上行大動脈へ送り出した血液の一部がまた左心室へ逆流している。それを再び押し出すために左心室に余計な負荷がかかっているらしい。傷んだ大動脈弁を取り換える手術を受けねばならない(エライコッチャ!)。2013年の年末に5日間の検査入院、翌2014年の2月から3月にかけて手術のため3週間の入院生活を送った。(で、どうだった?)いま振り返ってみるとその体験には(意外や意外)ある種の幸福感がまわりついているのです(なぜなんだろう?)……わかりません。よくわからないので以下、(過去に何度か参加した病院探検隊の経験を活かして)報告してみます。

●検査入院一日目

午前9時に病院に入り入院手続きをした。たくさんの人たちが同じ日に入院する。40人くらいはいるだろうか。大きな病院だしスタッフも大変だなと思った。病棟ごとに担当の看護師が来てグループでエレベーターに乗っていく。私は心臓外科病棟の一番奥の部屋に案内された。4人部屋である。a看護師がやってきて挨拶した。「高橋さんの受け持ち看護師です」(元気がいいのはいいけど、ちと声が大きすぎるな)。お互い立ったまま退院までの予定をつらつらと聞いた(座る余裕もない、忙しそう)。「明日25日9時から心臓カテーテルの予定です。26日は検査なし。27日は経食道心臓エコー、これで血栓がないか調べます。18時から結果をお知らせしますので面談を受けていただきます。28日10時に退

院の予定です」(4人部屋なのでプライバシーはほぼないと思ってたけど、やっぱりそうやった。ま、いいか)。口頭の説明もいいけど印刷物がほしいなと思っていたら、しばらくしてから入院診療計画書を受け取った。説明を聞いてサインした。a看護師は私の「受け持ち看護師」ということであるが、翌日以降彼女の顔は退院の日(入院から5日目)にチラと見ただけで、話すことはあまりなかった(説明書には受け持ち看護師が入院から退院まで継続して患者を受け持つと書いてある。3交代勤務でなかなかタイミングを合わすのが難しそうです。ま、いいか)。左腕に採血と点滴の準備をする(入院患者らしい雰囲気になってきたゾ)。レントゲンと肺機能の検査を受けた。

午後、B医師より検査についての説明を受けた(カミさんが同席)。B医師は若手で熱心な内科医師である。まず心臓カテーテル検査について。局所麻酔をかけて右脚付け根から造影剤を入れる。冠動脈に細いところがないかを検査。大動脈弁の様子を見て血液逆流の評価をする。リスクがある。カテーテルの管が血管内のコレステロールを削ると、それが飛んで脳梗塞になる可能性あり。2,000例中3~4例ほどあるらしい。右脚の出血跡は黒くなる。5時間の安静が必要。造影剤は腎臓に負担をかける。経食道心臓エコーは胃カメラより太い管を口から飲み込む。食道を通して心臓を裏側からエコーで見るそう(そんな裏技知らなかった)。検査に30分くらいかかる。とてもしんどいらしい。「しんどい」という言葉に力が入っていた。「しんどい」を何度も繰り返した。検査を受けた患者さんたちの率直な感想らしい(困ったな、私は普通の胃カメラも苦手で回避してきたのに)。当日は朝昼絶食。

病室へ戻ると、a看護師より明日のカテーテル検査の説明があった(やっぱり声が大きい。廊下まで聞こえる)。「明日の朝は絶食です。毎朝の薬は飲んでください。朝食は寝たまま食べられるようにおにぎりが出ます。安静の間は尿瓶を使ってもらいますので」。その後薬剤師さんが来て、カテーテル検査に使う造影剤や局

所麻酔薬、点滴などの説明を受けた。

夜はクリスマス食(今日はクリスマスイブ)で、鶏のモモ焼き、サラダ、吸い物、ケーキもついていた。手作りのクリスマスカードも添えてある。「一日も早いご回復をお祈りしています」という手書きのメッセージ(誰が作ったのだろうか。看護師さんたち? それともほかのスタッフだろうか。忙しいのになあ。病棟ごとに工夫しているのかもしれない。心遣いがうれしいね)。

21時より点滴開始。しばらく読書して23時ごろ就寝。隣のおじさんのイビキで何度も目が覚めた。ウトウトしながら夢を見た。……私はどこかの田舎の家の前にいる。私はその家に入ろうとするのだが、やぶ蚊にたくさんかまれた。刺されるとチクチクと痛い。家に入るとやぶ蚊に刺されたあちこちが赤く斑に腫れてきた。私は病院に行ったほうがいいと思う。カミさんが現れて車を運転して連れて行ってくれると言う。私はどこの病院に行ったらいいのかわからず、とても不安だった……。私は夢の分析はできないが、結構わかりやすい夢だったナ、これは。入院一日目の不安感によく感じとれる夢だと思う。



● 心臓カテーテル検査

検査入院二日目、朝は絶食なので薬だけ飲んだ。A医師が来て「がんばりましょう!」と声をかけてくれた。「はい」と返事をしながら、何かがんばらないといけないことがあるのだろうか、とふと思った。何をがんばればいいのか? b看護師が来て手術着とT字帯に着替えた。アンギオ(血管撮影)室に移動する。

9時、小さな寝台に上がり、寝転ぶと周りをグルリと何人ものスタッフに囲まれた。「あ、これは手術なんだ」とそのとき気がついた。検査だと思って油断していた。意識を手術モードに切り替えねばならない。右脚の付け根に麻酔の針が刺さった。急所に近く、柔らかい部分なので何ともいえない感覚である。針を刺す部分がチクチクする。昨日のやぶ蚊の夢はこれだったのか。あちこち赤く腫れる夢だった。局所麻酔だから意識ははっきりしている。左手の壁に時計があるので、そればかり見ていた。時折「……あれ」とか「おかしいな……」とかスタッフのつぶやきが聞こえる。こちらは聞こえているのだからそんな言葉はできるだけ使わないでいたきたい(不安になります)。何か具合悪いことでもある

のだろうか。9時30分頃、「ハイ、終わりました」の声が聞こえた。(もう終わりか、早いなと思っていたら)「高橋さん、これから本番の撮影いきます!」とA医師に声をかけられた。(え? これから本番?) 準備に30分かかったわけだ(それなら最初から準備に30分かかりますと伝えてほしいなあ)。それからレントゲン撮影の要領、二台のカメラがクルクル動いて胸の周囲を撮影する。「息を吸って、ハイ止めて」を何度か繰り返す。最後二回の撮影は造影剤が全身に回る。初めての感覚だった。まず首から肩にかけてカーツと熱くなり、次第に下がって最後は睾丸が熱くなった。思わずオシッコをもらったのかと錯覚した。そういえばからだの右半分は布で覆われているが、左半分は肩から足まで露出している。寒い。急にオシッコがしたくなった。

約一時間で検査は終了した。寝たままストレッチャーに移り隣の小部屋へ移動。看護師さんをお願いして尿瓶でオシッコをさせてもらった。この部屋は暖かい。ホッと一息ついた。B医師が来て、私の右脚付け根の傷口を15分くらいずっと体重をかけて押さえ続けた。動脈の傷なのでとりあえずの止血には、それくらいの重さと時間が必要らしい。結構な重労働だ(スンマセンナア)。押されているとまたオシッコがしたくなる。看護師さんに頼んでもう一度オシッコさせてもらった。結構な量が出る。その後傷口を丸めたガーゼで強く押さえ、粘着テープで強力に固定する。右下半身は身動きできない。ギャングに捕まって縛られたような格好だ。寝たまま、右脚は伸ばしたまま曲げてはいけません(5時間も!)。A医師の「がんばりましょう!」はこのことだったのか。

病室ではカミさんが待機していた。ストレッチャーに乗った私と一緒に帰ってきたB医師はカミさんの顔を見るなり「ご主人は結構しっかり……」と切り出した。カミさんは「ご主人は結構しっかりしている」と一瞬思ったらしい(私もそう思った)。ところがB医師は「ご主人は結構しっかり……血液が逆流しています」と続けたのだ。B医師は若くて熱心な医師だと認める。しかし時折言葉づかいを間違ふ。昨日の説明のときも弁置換手術のことを「まあ、大そうな手術ですわ。心臓を止めて人工心臓を使うのですから」と雑談風に話した。さばけた話し方のつもりかもしれないが、よい言葉づかいではない。今日のカテーテル検査後にも私の傷の止血をしながら、次回の経食道心臓エコーのことを「次はもっとしんどい、しんどい検査ですから」とずいぶん「しんどい」を強調していた(正直なのはわかるが、そんなに強調されるとこちらの気持ちが萎えてしまいます。伝え方の勉強もしてくださいね、お願いします)。

(つづく)